侘び・寂びの色彩美とその背景—和の伝統的色彩美の特性を求めて

Wabi and *Sabi* as the Background of Japanese Color Aesthetics: Pursuing the Special Qualities of Japan's traditional Color Sensibility

吉村 耕治　Kohji Yoshimura　関西外国語大学　Kansai Gaidai University
山田 有子　Yuko Yamada　色彩講師・挿絵画家　Color Instructor and Illustrator

Keywords: 日本の伝統的色彩美，侘び・寂び，日本文化の美意識の結晶，渋い中間色.

1．はじめに—日本文化の中心にある侘びと寂び

日本の伝統的な美意識の一つである侘び・寂びは、確かに俳諧、浄瑠璃、能、絵画の他に、陶磁器（焼き物）・漆器、染織品、木工品、すき和紙などの手工芸品などに、その典型が見られる。しかし、決して過去の芸術作品のみに見られる美意識ではない。侘び・寂びの精神は、21 世紀の現在でも、多くの日本人の日常生活の中にしっかり根を下ろし、日本文化の基盤を形成している。

（龍安寺の方丈庭園と塀の壁：侘び・寂びの実例）

本来、侘びと寂びは別の概念であったが、現代では一つの概念として用いられることが多い。侘び・寂びは、一般的に閑寂（かんじゃく）で清澄（せいちょう）な風趣や、簡素の中にある落ち着いた寂しい感じ、静かで味わい深い風情、静謐（せいひつ）のきわみ、枯淡の境地を表すと考えられている（cf. 野村 1994: 195-198）。しかし、その根底には、この世のはかなさや人生のはかなさを感じる無常観が存在している。単に仏教の無常観だけではなく、無常であるがゆえに美しいと感じる美意識（徳）が見られる。侘び・寂びや幽玄は、悟りの概念に近く、日本文化の中心思想であると言及されている（cf. 森神 2015: 24-25）。

日本の美意識には、一期一会の精神や、簡潔さ、暗示・余情、不完全の美・いびつさ・不規則性、ほろび易さ、自然・調和・依存志向の傾向が見られる。侘び・寂びの美意識には、不可避なものの受容（無常観）や、自然を観察することから得られる真理、細部の目立たないところに存在する偉大なものに気づく喜び、不必要なものを削り落とした簡潔な美、飾り気のない素朴で簡素な美、神聖なものに対する畏敬の念が含まれている。これらは、まさに日本の美的感性を表し、「間」や余韻の尊重にも繋がっている。詫び・寂びは、「物の禅」と呼ばれるほど、禅と深い結びつきがある。

詫び・寂びは、日本の伝統美の中核を担っており、究極の本質的美を追求する精神から結実した総合的な美意識を表している。素朴（rustic）な原始的芸術（primitive art）の要素が見られ、自然の素材を大切にしており、簡素な土臭さも見られる。本稿では、日本の代表的な美意識とされる侘び・寂びが、日本の伝統的な倫理観の「自然の清浄さ」から生じていること、及び、詫び・寂びの色彩とは、控え目と洗練さを持った「渋い中間色」を表していることを明らかにしたい。

2．侘びの本来の意味と色彩

侘びは、文法的には古語の自動詞「侘ぶ」の連用形名詞で、古文では草木が生い茂ったり枯れたりするように、人生も栄えたり衰えたりする「は

かないもの」（栄枯盛衰）であるため、貧しくなった状態を表すために生まれた語であった。最初に、「落ちぶれる、落ちぶれた生活をする」の意が生じ、「気落ちする、悲観する、心細く思う、嘆く、悩む」の意で用いられていた。万葉時代には「思い煩う」の意で「思ひ侘ぶ」という表現が用いられている。自然の中での閑寂な侘しい生活を送ることを意味していたが、14 世紀ごろからそのような生活を肯定的に楽しむ方向に進化している。表面的には貧弱でみすぼらしく見える困窮状態であっても、その枯淡の境地を肯定的に捉えて、「閑寂を楽しむ」の意への変化を遂げている。「あやまる」という意味もある。つまり、侘びは、貧しくて不足している状態でも、その簡素さに充足感を見いだそうとする「知足の美徳」を表している。侘びとは、まさに私欲を捨て、欲望を調整して質素な生活を送る「清貧の精神」を表している。侘びは「諦観」の境地、寂びは「知足」の境地を表すという指摘も見られる（cf. 森神 2015: 22）。諦観とは、悟りを得て超然とするために、欲望に限界を設けているので、諦観と知足とは、表裏一体の近い意味関係にある。同様に、侘びと寂びも、表裏一体の近い関係にあると言える。

侘びとは、洗練されており、上品で優美な簡素さに、感動や美を見いだそうとする美意識を意味する。その侘びの精神を作り出しているものは、木や、土、石、わら、竹、各種の食材などの自然の素材である。それらを使って、本来持っている色・形・質感・味・香りなどを引き出して表現することによって得られる美しさが、侘びの心髄である。自然の中に見られる美であるが、自然に置かれている状態の美というよりは、素材の持つ良さを最大限に引き出そうとする人の手が加わることによって生れる美しさである。人工的な装飾を排除し、ある面ではみすぼらしいと感じられる「質素さ」と、「美しさ」の両方を兼ね備えた微妙な美しさを意味する（cf. Itoh et al. 1993: 7）。

要するに、侘びの世界の色彩とは、木や土などの自然の素材の持つ美しさや味わい、静的な彩度の低い「渋い中間色」を表している。

3．寂びの本来の意味と侘び・寂びの精神

寂びは、動詞の「寂ぶ」（「荒れる、古くなる、色が褪せる」の意）の連用形から生じている。形容詞の「寂しい」や、動詞の「寂びる」、金属の場合には「錆びる」という語に意味の繋がりがある。「枯れて風情が出る」とか「古びて趣が出る」と言われるように、時間が経過することによって引き出されてくる美意識を意味する。日々、愛情を注ぎながら使い込んでいる間に、自然とにじみ出てくる美しさや味わいを意味している。

さび色（赤褐色）は、英語では rust で表現されているため、侘び・寂びは、英語では素朴さや質素さを表す rustic を用いて説明されている。この日本語と英語の色彩は、偶然にもほぼ似ている。

これらの侘び・寂びの深い心に魅力を感じる精神の背後には、日本の風土の中で生活してきた人々の人生観や倫理観が反映している。

4．侘び・寂びの基盤にある日本文化の伝統

豊かな自然の恵みが与えられる日本の風土には、農耕文化の助け合いの精神が見られる。そこで、日本の伝統的な倫理観には、無情ではおられないという人情味から、人間の関係（つまり、縁）を重視する精神や、内面的な自己の心情の純粋性（無私無欲性）や誠実さ（正直な心）の追求がある。これらの精神は、今を誠実に生きることを促し、古びたものや年老いたものに「円熟したもの」としての価値を見出そうとする侘び・寂びの思想に繋がっている。自然に生成されるという観念や生得的な真心を重視する精神も見られ、この精神も、侘び・寂びの美意識の支えになっている。

日本人の倫理観には、「誠実さ」や「誠・誠心・誠意」が見られる。誠（まこと）とは、ま（真）＋こと（事、言）の意で、私利・私欲を離れて、嘘・偽りがなく、真心をもって正直に熱心に事に対応する精神を意味する。誠実さは、他の人や集団に対してだけではなく、事物や自分自身に対するものと考えられている。唯一絶対の神のような絶対的な規範が見られない地域では、誠実さが大切にされてきたという伝統が存在している。

日本には「清き明き心」「正直」「誠」「潔さ」から生じる「あきらめ」や「覚悟」から得られる心の安定（これは無常観やはかなさに基づく考え）という心性も見られる（cf. 相良 2009: 153）。はかなさの原義は、はか（仕事などのやり終えた量）がないという意で、既存の価値体系を否定する 19 世紀後半以降に見られるニヒリズム（nihilism）とは異なる。諦め（元来は「明らかに見る」の意）や覚悟は、潔さを求めているが、決して自己否定を肯定する概念ではなく、悟りに近い心性である。人は生かされている存在であるという考え方が日本にあり、誠実に自分の一生を生

き抜くことが大切で、落ちぶれても、今を誠実に生きることが重要であるという教訓が、侘びや寂びの精神に含意されている。

日本人の持つ誠実さは、道理に対する誠実さではなく、現に存在する状況に対する誠実さである(cf. 相良 2009: 101)。ここに、状況を重視する日本人の感性が見られる。私欲にとらわれず、人と人の関係を大切にし、自然に、あるがまま、自分らしく生きるという心性が根底にあり、和を尊ぶ精神が生じている。和には調和だけではなく、平和も含まれている。これらの日本文化の伝統的な倫理観が基盤にあることによって、日本の代表的な美意識(徳)の侘び・寂びが生じている。

5. 利休が完成させた「侘び茶」

侘び茶とは、茶の湯の一様式で、書院で行われた豪華な茶の湯に対して、簡素簡略の侘びの精神を重んじた茶の湯を意味する。侘び茶が流行したのは安土桃山時代(1573-1603年)で、創始者は村田珠光(1422-1502 年)、侘び茶を完成させたのは、千利休(1522-1591年;法名:宗易)とされる。藁や茅(かや)葺きの屋根の粗末で小さい家で行われたことから、「草庵の茶」とも呼ばれる。

茶の湯と能は、室町時代(1336-1573年)から天下人のたしなみになっていたため、戦国大名の織田信長(1534-1582年)も豊臣秀吉(1537-1598年)も、茶の湯を、社会的な地位と富裕さを暗示する示威の道具として愛好していた。

茶道の始祖、村田珠光は、茶室を4畳半に縮小し、屋根の様式を4枚の書院風の宝形造り、天井を節なしの杉板、壁を鳥の卵のような色をした「鳥の子紙」(とりのこがみ)の白張付、床を一間で作っている。利休は、茶室を4畳半から3畳、さらに2畳まで切り詰め、亭主とお客との深い心の交流を大切にしている。利休は、侘びた趣の高麗筒の花入を四畳半の床柱にいつも掛けていたと言われる。筒花入の他に、楽焼の創始者である長次郎(1516-1592)作の半筒形で、静的な黒と中間色の赤の茶碗、左右対称の安定感のある整然とした美しさを持つ与次郎の茶の湯の釜、精神を重視する禅の象徴としての墨跡、一汁三菜の簡素な懐石などが、利休の侘び・寂びの理念を生み出す上で大きな役目を果たしている。

長次郎作の茶碗の内、千利休が名作と見立てたと伝えられる七種の茶碗が、黒楽茶碗(3種)と赤楽茶碗(中間色の朱に近い4種)である。茶の湯の懐石は、禅宗の影響を受けており、温めた石を懐中に入れて、一時の空腹を堪え忍んだことから生れた表現である。茶の湯で、茶をすすめる前に出す簡単な手料理を意味する。その懐石の形式を完成させたのが、千利休とされている。

6. 茶の湯の精神と侘び・寂びの心

茶の湯の世界では、庭は「露地」と呼ばれる。これは、地位や身分を取り去り、本来の自分が露わになることを表している。露地の基本は、飾り気のない風情とされている。利休は、その露地や自然の材料を原形のまま使った草庵風の茶室の中に、侘び・寂びの精神を表現している。砂と土の壁や、節の付いた杉の丸太の床柱を用い、床の間の天井と三方の壁には土を塗り込め、主室の天井には竹材を多く用いている。このような自然の素材は、純色に白と黒を混ぜた中間色である。この中間色であるところには、中国から伝えられた風雅や風流を尊ぶ文人趣味の精神に、簡素を大切にする禅の精神が合わさっており、幽玄の境地を求める心も反映されている。

(日本国王としての示威を表す金閣寺:鹿苑寺)

(簡素な精神を尊ぶ禅寺の銀閣寺:東山慈照寺)

幽玄の「幽」は「かすか」、「玄」は万物を包み込む「奥深い道理」、つまり、人の生きる道の活動や万物の活動の「本質」、神秘的な物事の本質を意味した。『老子』は、第一章で「玄の又玄、

衆妙の門」（p. 36）と述べ、奥深い上にも奥深いものから、あらゆる霊妙な現象が生れてくる、と言及している。金閣寺によって代表される北山文化の時代に、観阿弥・世阿弥の父子は、無骨な大和猿楽を華やかな印象に一新させ、洗練された芸術に導いている。その時代に幽玄の意味が、能では厳粛な趣と物語性に加えて、見た目における洗練された優美さの意に変化している。

（「吾、唯、足ルヲ知ル」と読む龍安寺の蹲ばい）

（龍安寺に見られる侘助椿とその看板）

龍安寺の茶室の「蹲ばい（ついばい）」には、「吾、唯、足るを知る」と書かれている。蹲ばいというのは、世塵を落とし、心身のけがれを落とすための場所で、地位や身分を取り去って、本来の自分の姿が露わになる場所という意がある。

老子は、第四十六章で、「足るを知るの足るは、常に足る」（pp. 100-101）と述べ、群雄割拠の時代における覇権を争う果てしない支配者の欲望が人々を苦しめていることを指摘している。欲望を追い求めれば一層増大して、終に満ち足りることは得られない。老子は、足ることを知ること、欲望に一定の限界を設けることを説いている。

7．おわりに―侘び・寂びの美意識から美徳へ

利休は、目で見る美しさではなく、その風情の中に感じられる心の充足感を大切にしている。まさに心で見る美しさである。茶会の点前や作法を厳格に行うことで緊張感を高め、一期一会の精神を大切にしている。利休は、自然の造形を生かし、自然界に見られる色合いになじませながら、茶会の道具や懐石、茶室の部分に工夫を凝らすことにより、侘び・寂びの美と心を体現している。

日本最古の茶室建造物で、数奇屋建築の原型、利休作と考えられている茶室が、妙喜庵である。侘びの妙喜庵と秀吉の黄金の茶室とは、対極にある。侘びの文化と黄金の文化は、対立しているように見えるが、実は不可分で相補的関係にある。

侘び・寂びの色彩とは、自然界の素材の色を活用することから、色みや清色を否定し、草木の香りのする簡素な色彩美で、茶色系やグリーン（緑）系を中心にした渋みのある中間色を表している。

侘び・寂びの美意識は、物質的な豊かさではなく、知足の心の豊かさや風流心を暗示している。そして、今を誠実に生きる精神を含意していることが理解された時、美意識から美徳に進化する。

主要参考文献

1) 小林重順（1974）『日本人の心と色―色彩によるユニークな比較文化論』東京：講談社。
2) 相良 亨（1984, 増補新装版2009）『日本人の心』東京：東京大学出版会。
3) 千 玄室（2016）『日本人の心、伝えます』東京：幻冬舎。
4) 高階秀爾（2015）『日本人にとって美しさとは何か』東京：筑摩書房。
5) ドナルド・キーン（著）・金関寿夫（訳）（1999, 英文初出 1969, 日本語訳初出 1990）『日本人の美意識』（中公文庫）東京：中央公論新社。
6) 野村茂夫（2005, 2012[14]）『老子・荘子』（ビギナーズ・クラシックス中国の古典：角川文庫13618）東京：角川文芸出版。
7) 野村順一（1994: 増補版）『色の秘密―最新色彩学入門』東京：文春ネスコ。
8) 森神逍遥（2015）『侘び寂び幽玄のこころ―西洋哲学を超える上位意識』東京：桜の花出版。
9) 吉村貞司（1967）『日本美の特質』（SD 選書20）東京：鹿島出版会。
10) Itoh, Teiji, Ikko Tanaka, and Tsune Sesoko (1993) *Wabi Sabi Suki; The Essence of Japanese Beauty*, Hiroshima: Mazda Motor.